



梅文庫

5  
5599





門へ5  
號5599  
卷

己酉年  
正月  
廿五日  
庚辰  
年  
正月  
廿五日







梅文庫卷上

さくけりき雁のたきや草の凍

獲物

井堰そくそく星次新氣

湖山

縛撥ら緒くもき山丹

川峨

西の對より役さし月来

物

うはつらの雲をわすれ月のか

山

きりく麻の汐よみり色

峨



撰待をうりうり控をきとるのり  
 かほえ書するうりうりけの底  
 降し給も南のむつを伊賀の町  
 曠の赤解の焼くさゆる也  
 笠の控をさむい昔蔭の日もさ  
 うりうりたれ男夏の白雪  
 床をさむうりうり月の夜は知る色り  
 酒のせまうり 出さぬ妹  
 山物 山物 山物 山物 山物

沼連の井を雨の日毎日蓋をうりて  
 芦系をくき月の續表  
 立うけし蓮二枚のむの岩  
 春のむらさきのむらさきくる縄  
 昔とよ人もまらぬ長等哉  
 炬火をえきり 影をふる両  
 まくくく大根洗ふ神を月  
 廿日はうりうりの母の苗をす  
 山物 山物 山物 山物 山物



采立多 船本 船をい 坂口 子  
子曲の川の色もかくさけ  
おりの河を恨ま 河を恨  
名月の米 暮何 けり  
小雁 持る 日の 燈 魚 せ へ  
くむ 瀬も どの 煮る とも 湯き とも  
おの とも 此 伝き 脊戸 の入 ち  
味 山 物 峨 山 味

子四 良ハ こと こと こと 葉を 刺さ ころ  
有馬 細工の ほつれ とも とも 籠  
味 曾 水も 茶の もと とも 山 の 裏  
杉 菜を 煮つ け 田の 中 けり  
鳴 多 け 梅 多 多 引 けり  
はく とも とも とも 交 陸 する 家  
味 山 物 峨 山 味



ふてゝの正月同き曆くりて 鶯笠

床るるを昔よりかたる火桶と 左節

月明きあふまけしやとをけしと 逸山

一浦の原もたろふ陸中素 茶静

くくくみの枝よきつるさむはけり 梅壽

水傑のつるさ門の嵐くさ 川越

山里の夜葉もふくはくしの葉 湖山

冬きまの葉ふくはくは移る南 直也

入月もくも初年の稲書り 一貞

日半はくは枝の葉落る晴の中 喜山

神無月や新日ふくくく日 上毛 川二

葉山葉や海鳴止る早のちる 日光 祇山

祝詞もやふあふや雪の初鳥 安房 三齋

藤もせしむは初もあふてふも鳴 馬又



除夜の樹人さへくまの薫る也

方固

園雨をふんく麦蔭をとり小

信法

玉蓬

老くまや柚のけも村し寒の家

虚白

茶山をやまへり蔭をとり宿の岩

出羽

柯雪

寒月やまれくまのまのまの

陸奥

御風

松の葉はゆきさひまのまのまの

陸奥

与人

山水の音して春のまのまの

比叡川

紫明

日の落く木を音する穂芦の光

竹馬

馬起るあつさへまのまの

加賀

年緒

老くまのまのまのまの

秋中

乾夫

まのまのまのまの夜のまのまの

河

千崖

山里や雪のまのまの

河

卓池

冬の月をまのまのまの

屋生

一馬

東をまのまのまのまの

近江

宜彦

鶴鈴の鈴日まのまの

閑翁

東をまのまのまのまの

蕙布



草の戸の跡走ハ梅を折るのり  
土山 虚白

足垂しと夢の中影さし  
措磨 泥中

香くしてもふきハ香をささるる  
浪花 五芳

小くくきハ山伏ら其石露の花  
系 喜山

葉山系やふつ咲てハ五日あき  
系 布雪

朝をあききぬ厚き也 葉をささるる  
守三

満月や降止くく雪のあき  
鳥頂

水香と日くくく丸きふ  
蒼虬

梅文庫 卷下

朝けけし出れくくも夕梅  
浪花 月居

花もねきくくくむくも  
雪雄

大積のきくくもきめぬ有様  
屋鳥

生垣やきくくく梅か  
長翁

花よけぬくくく日比  
米彦



新も居りあつてははここの喜の水 北映

年くくや大まきもきん乙子の葉 月江

よくとあるりや花や花よくきの月 梅價

踏送ふ花と葉と 董う取 十大

くは風や何とてとあるそりのき 金葉

花はもあも新起すは日く 貸僕

四隅何る小庭もちてもまの月 風池

梅の白は葉は及んくまうか 乙亥

昔張るまや古田の喜の水 素童

草の根よ小もくくすくや春のき 白糸女

大河の青ともまきん喜のき くら女

春寒くく南丁の実に赤くれた 無物

咲梅は葉葉くくくも死くくや 棹歌

孫子見きり花くは花よ花よ杖 椿堂

雨かきり梅は花きりくくく 省吾



初子の日はれても松のきそしよ 野渡

松とつも人ハ久きし 菊の夜 淇石

山吹やいつを待りの法 菊 菊所

北つてきよ下松のゆる 柳の家 昌作

梅白くこぎやこの節日ハ西よ 斧杖

さふゆは吹合きくく 釜の蓋 箕山

き柳や十粒はくくの物の幣 归来

鳴まてきよえて鶯 立くけそ 蚊山

狐治る屋ハ百歩のち能 柳う菊 虚舟

あを厚よまきき 春の 濱の松 津 知牛

いつくのきを衝の 耳と赤き 梵山

きのこゆる春の日数や初産 冬と雨

又つけても中し 巻き 櫻うね 四十一 宗古

大をよくすかき 雛子の 高きと 李東

よきまのきへしひき 櫻うね 涼涛

夕波のきよえそ 白き 櫻うね 一呼



動くは月を柳の影を素 鹿明

雨くくく 淡くくく 雉子くく 上河 秋拳

風くくく 香く余くく 八日くく 曆中

清くくく ぬくく 孫くく 鄙曇 吉田 赤守

赤くくく 歌くく 心くく 睦くく 歌く

きくく 赤く 花く 二日く 楽く 履 三岳

花くくく 近く 之く 侍人く 敦 相模 雉扇

かき心日く 尺く ぬきく 舟く 東舎

雲雀く 鳴く 或く 有く やく 何く 取 芝得

心く 鳴く や 紫胡く 系く 其朝

この軒く 花く 珠山

田螺く 沙く 妻く 月 永枝

善田川

四五丁 櫻 角 住居 角 撰 雀角

花く 山く 泉盛



清くはと地なきなり本質宿 笑く

雨の戸よこきうけさすとりしる 信法 可厚

山吹のはくくハ白きかうめう菊 亀夫

吹くちる葉の古葉も春の月 叢

夜の明て丸く赤くくを秋の月 梶芝

吟くくくは葉くくくく土華が 楚水

賞や山田の氷を吟ふ如く 軒井沢 霞邦

鬼の豆出してくくくあや 世なく 音隠

ハき穢ちくくぬ 夢くくく月の中 禾木

草餘や孫もぬくさぬ 川 階 加賀 草均

梅ちくくやきくくあきくく 畑の手 麻直

けくかきや 麓の柳 明る際 大聖寺 其翠

稚子もあきのけくくまき 初日く 風芝

初念やいれ草くく芽さす比 夜鹿



羅漢寺の雲をよけぬ喜の人 裁後 東城

まじりたや 二川

。 乙二

そく 陸奥

掌の 日人

ま 夢園

芥の根 柳村

水邊の 馬年

佐保 女 亀丸

春 福時 夢南

梅 壺山

ら 高美

何 南河 谷雄

梅 左聖川 素龍

山の井 兩考

月 多代女



一面くし梅を明るや左所の夜 女房 校長

夢を泊るきや世よりいふの松 素共

世の死をを盛るよ出きをを苦あたる 常陸 平雄

学より千きりのあくるいふる 下徳 素英

石山やものつれを 上野 春成

かゝるの来て増まる 上野 旬光

ふらけやたりやる舟のむふ 志げ

西月も女はる 武蔵 不王

そはるや登るも濁さぬ水の上 樂山

井のくや登来あくも 序 樂水

初東風の芦色 新集 一歩

とるまていふあもくわさぬ 和言

あのをねやこのき 女年 松月

うるくしと人の出 吉川連 一種

田ふし鳴る 正六



法月董印くくや鶴の歩くまを 専九

藤葉よ夕日のさすや枕の忌 柳寄

首をれて横よぬく山影之如 一水

春水きき首の塘く来まらむ 魚之

ぬる日結深山よたやまこころ 芳竹

さほ風やほくくすむ根葉の葉 北代

糸葉の本ほまぬを眺ま志るん 日光

空澄きく夜涼き花の曇らうぬ 其翼

山中や人のほろくくうめの念 隆道

梅くまや水よふれくる奈良の種 枚香

白ふもの何くく萩よさほの月 三樂

枝折戸や萩の古根も露の蒼 古友女

雪く雀鳴やまきき芽落る 其好

元定めこふハくれくく種あろく 月川

小全井

細谷

深根井

石橋

室積社中

栃本

某師寺



山吹や清水もちくる寺の門 霍明  
 横夜や羽音のこきくくるの飛 与風  
 草の戸や猪の先あるはく不董 川柳  
 ふる雨の七分三分や梅柳 露川  
 鶯のうきこゝた人のこねるる 春壽  
 小酒屋の内儀のこきくく 蛙鳴  
 室ハ島もて  
 花の陣雨もきき男氣居るか 一氏  
大町新田

夕のけや木立の重きさ 雲の雪 雪梁  
 響りの畑のさする二月うね 湖外  
 山松と日——曇りの 睡の南 星谷  
 芥の柄をすくくさうり山の峰 松花  
 白梅をえぬるりしり年寄ぬ 萬里  
 行幸や鯛賣女々六とふも 書丁



走る井の流きて育つ鯉うね 典例

春の夜や月落きハ梅の中 素樸

初午の加茂川の舟のほりも也 幡

不沙法なく吹まやう梅春の鴨 典山

雲のあも花雪る夜のさハるが 宇橋

ささる東の梅つるも月 素融

石梅の雲は落るかお根や 沂流

紫船の岸守る春やおほる月 八潮

舟人ハさる傍ぬるや花のちる 松雨

梅さくや立足けける岩の上 南井

朝うけや涉草の雲を出る 車雨

梅古くさる中よる秋くね 吐峰

正月ハさるこころよ梅くね 枕児

素代ハ小まお出くはさるは 牛長

鶯や東さる春よおま 樗山



花ちれをさゆる木乃や一きり  
亦玄

いく度も袴着る日世うめの茶  
目白 里水

ものこまの足らぬ庵家も旅 月  
巴水

鶯の物毛すけは 雪解が  
菊角

鶯の水さし  
雉友

梅の香の小ききよりの鶯 鶯  
木化

春の山 浪うつ 霞よ並はま  
如松

香とよまらるる山吹の野  
柳橋 玉塵

鶯の 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯  
布川

旅人の 診糸も 折 蕨う南  
全

其多や中よ新  
心と女

吹とるこ  
柳川

玉鉾の  
松杜

川先の  
禾葉

まけし  
茶静



来のよゝい古き名こそを 葦  
 るの枕ふきはくく 可景  
 江のうゝ東のけつまるや春の月 鏡器  
 雪よゝゝ厚地と 玉壽  
 ちよゝめ 如麦の中ひ 春のふ 山輝  
 ちよゝめぬ 葉のふる 席し 山の香 梅令  
 連翹のまよふ 似ぬ日を 咲よけよ 湖山  
 山よゝや 舟のぬきぬき 川の 川峨

駿河町連

人けし 花 櫻の 絶ぬくも 菊右  
 雪の 海 流も ちよゝ 宿の 柳小 青芝  
 白の 雪も ちよゝ 小 家や ちよゝ 柳 列水  
 いつゝの ちよゝ 川の 系と ちよゝ お 不ろ 月 洛水  
 雨とれ ちよゝ 茶の 押合の 櫻の ちよゝ 音口  
 蝶まよゝ ちよゝ 花の ちよゝ 素山 子の 子 朴成  
 鳥居と ちよゝ 高し 椿の 花の ちよゝ ちよゝ 烟姿



暮るるや障子ぬれも田のこたゑ 馬曉

草や木の常もききし一箇のきき 里外

いささ火のききけり満の横奈 冷水

並くはちきりもききんハ市横 王亮

梅のきりはききハ酒きききり 一蕙

水もきき二日は来し二月の如 孤山

泣なくもきき余ききのゆき 行馬

焚のけりも焚ききき出船小 三雄

暮るる家の家替もききし横の如 喜旋

厚のききもききのききりや鳴 直也

糸もききもききや月の子ききき 且臺

初花や敷ききりし夜のきき 越児

芽柳や小石のききき水のきき 子々

こききし一や雪ハ初日のききき いつい

とどききもききや菊ハ耳もきき 菊鳩



院の景 采古をまつる 花 曉河

春宴よささの中ゆく 燈水に 寒松

さつ晴るれはよ 庭を 蕉雨

川原を 移して 酔う 雄嶺

命 流して 暮し 氷ぬ 雪 霞

お梅や 束を さら 掃り 先 双揚

古々の 水流も くる 性 竹 枝

采の戸や 夜う ぬれを 花の 宿 り 寸風

雨の束を 持ち くる 葉 籠り 碩 烏

初冬のもりの 入まき みの 二日 月 里 丸

鐘の音の 采果 みる 志 賀の 里 菜 山

楳葉の ゆつら おほき 木 芽 吹 梅 宇

き果さや 庭へ くれや 寄 傍 仲 意 橋

酒の 采果 里の 名 沙 干 其 翠

日 採り や 藪 雉子の 糸 希 拙



うち曇る花のふおき清殿山 箕香

穠夜や雲舟院の 小笠垣 一宵

昔頼朝のくまの影のふりけりて  
沙弥のほろを建立しゆけりおの  
景時をゆすくと申しゆえ侍る  
いまよりの人の後を屋敷にて

橋原も花よハヤキ 慕堂 篋物

貫齋 奥行

穠月さても雲をくたき夜ノ菊 梅壽

篠のからさよみゆる霧の巢 篋物

深き小籠の葎をたぐさる 直也

井戸のしづく白を忘れしるり 箕香

よき年の枝くまむ板の角 物

菅刈くろの唄り減るつ 壽



青空や嘉定の餅を存比色  
油の阿との 僕る 板 妻  
元初る人かすくねる園の神  
旅の抱女の馬をこハクは  
市振ハ曾良く筆ふもあぬ月  
阿くは 葉くく 雲のくくく  
おくは 檜社のあくくくく  
木 眞 造くくくく 助目也

音 也 物 音 也 物 音 也 音

法更の中へ 袴を穿くくつけ  
舟の首途も 花の 朝を  
楠の芽のくくく 葉をもくくく  
東風の紅くくく のさめ 菊 菊  
袂くく大豆をかきく 鯨くく  
家越の門を 流くく 坂  
花さくぬ 葉木のあを 流くく 葉  
碑 かくも かくく 也 忌の酒

音 也 物 音 也 物 音 也 音



ちりくちり夜早の早守の橋の上  
 杖持下されきり冷へもる大  
 脊のふもぢぬ男を患ひし  
 弊のちりくちりもぢぬ葉  
 ほろも菜の番ふもぢぬ月の家  
 とりくちりぢぬのこもぢぬ  
 宗法ハワとぢぬ保くもぢぬ  
 草鞋ふくちり念佛すめる  
 青 也 素 物 也 青 物 壽

底まきり沙まきりくちりりり  
 鳴きまきりくちり枝りゆる  
 一むくちり陳皮の埃をけり出  
 于任の市に休むもかき  
 けり歩も急の日はけり合ひて  
 雀の聲まきりくちりりりり  
 青 也 壽 物 也 青 物 也



田喜庵與行  
金井次韻

つゞ玉ハそのむらゝぬき 梅 花

菊所

鞍おく馬子尺と体 陽 光

獲物

野老ふる家ハ兔のさくらりき

夢南

ほろめく枝も家を竹ふと

所

つゞれぬハ忘るゝ似し月の重

物

さゝとくらのり ちんちん菊の日

南

常をふ雀とふる せきも始

所

顔くくくする 龜持幸の傍

物

鶴のたまちくくくつる 橋の畔

南

そりのりきふる 苗の二名 中

所

故帳越はものりふまての 契くや

物

何くけきききききききききき

南

古りれと月ハ 甚とむくれりと

所

おもき 轡もほく家の戸

物



推の穴の幼き猿を打ちて  
 波のさぬやまのそとく  
 さく花の子あり梅はいつの  
 袂の峰をさくし宿はさ  
 道そむの移りもさる昔の上  
 袋草一歩の繁しう出  
 け遠ふふハ部の運め  
 螢のやうな眼をかきふる  
南  
所  
物  
南  
其翼  
星谷  
一肖  
翼

かさく傷きも思ふよ  
 世よハサ  
 山松の雪のわのえく新あけ  
 研のふのそはまもか  
 清佛乃石は鹿イ  
 鯨の腹はくつるさ  
 依けけの踊ちる月  
 何の市の草をま  
谷  
肖  
翼  
谷  
肖  
翼  
谷  
肖



既陀うけて素もさうりも牛の脊目よ  
ふとふふ来る腰越の袴  
さう久る鯛の刺身は花ちりて  
さうふふるの人の列も時  
薄もはくぬ宿の夏俵  
夜中ゆれを山のうけさす  
翼 谷 肖 谷 翼

雪玉を片押しきく揚る  
鯨のむはは島原のさや川  
花は日の国燈裏裏けをぬく  
紐もよこさる程中さく月  
昼敵の葉くれいそく秋もな  
る追放りつ芳のすす山  
護物 亦云 物 云



ちりす槌 浮田の殿は先付  
 かゝりはくは書こ小屏風  
 鶴鶴と去年の仙米く色  
 榎火よりは書りの藪中  
 何しろはまその柿むく水く  
 貝系との旅おくは秋  
 かゝり懐の睡も盆の月  
 素の何くく解すたる髪  
 物 云 物 云 物 云 物 云

箴の目は教もみくく心ゆ  
 是くえんかうく書る脊戸山  
 翌糸るやとくは盆の盆買は  
 酒の口きる連翹の宿  
 物 云 物 云 筆

音韻命書林  
 音韻命書林  
 音韻命書林



青晴舎奥行

喜山

孫入赤かしの唐阿ま字めの花

薺の葉も糸むつゝ月

衝崎うけも天々こ綴ぬ言

岡田ふり角の降消る也

百きくく志くも花笠を肩おけ

宿並もくく花まきも朝光

蕨物

里丸

山

物

丸

木枯くりし笛の音を糸色り赤

恒造は梓を埋むる言

態中語や聲のゆき輪の得く

粥の下多く余風のまぬく

和の葉もくま敷をくはちまもきん

平夜も赤は峰の以糸くく時

仏おく底も持込后の月

顔もおほえぬ星崎の人

山

物

丸

山

物

丸

山

物



鞍 壺よりくもくもとふ茶筥  
婦 撫いてよ 運る可也  
ゆゑ水の底まを様 咲くは子  
蕨 伸らつ 藤のつぎ畑  
御 揃をもの 修家の名を呼ぶ  
茶 子とらふも 屢斗 造り家  
灯 もとくも 舟の入り 舟もや  
ワの葉 吹く 西風 北山  
山 丸 物 山 丸 物 山 丸

掌 もとく 寄比も 舞る斗  
襖 履くつる 衣のやき 一き  
ほくろく 手越の 鐘も 守納め  
去るま 劣るもの 来く 砂る 雲  
ゆゑ火のやき 焼つくは 芒  
籬 ふは 償の 盆 色  
痛くも 喜六の 杖を 芽出度うま  
さくく 色 織る 月  
丸 山 物 丸 山 物 丸



羽うけし木練の柿花何く年  
 山伏もちりきんか通さん  
 乳離きの免逃き〜夕万葉  
 事の何〜の 終もあきき  
 窓に待花の志き〜山家集  
 社日の酒のぬ〜何の友  
 丸 山 物 丸 山 物

追加

乞食の小袖くれはもさね(盛) 團扇

五斗米の煮〜を待〜  
世のさま〜

袴 足〜の年〜の茶も散りも〜 采佛

志〜梅や竹〜の 新の衣 菖香

春をか〜教〜の 田螺う形 方斛

梅ち〜や藤のき〜の 水る 南亀

くゆる海〜の 木芽芽 故山



昔くく大さく出さき 枕の月 加賀 雪丸

上野有川連

日をおくめかあし梅もよ通ふ 三倉 竜朴

りの園のたろろまらる季景の山 権田 其翠

すて白の芽もくは日の 枕のた形 真貫

藩の英は風呂敷のくを解きたり 路久

春の水冠の紐もそくく日丸 水沼 可九喜

みくちの指く出さき春の山 柳曉

大まきくく盛も持は山はくき 三倉 染尾

笠をかき尾上は梅くは日丸 水沼 竜秀

春の夜をみくくはく梅 花 三倉 竜彦

山吹やうまきさくく里く 川浦 良朗 四年

沙書の舟はくく一葉の月 水沼 旦見

翠のふふけさく 弥生く菊 川浦 烏谷

縣百あくくすくくのを形く 赤井 鶏羅

み梅やうくくく 赤井 母の霧 台



櫻 物 けりくちうくもふよき

詠 帰

藤の芽 花は押さえて 伸あつらん

斗 月

品川や 舟のききま いらのかと

鶏 周

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 品川, 舟, 鶏, and 周.*



